

## 身体的な被害にあった方々の声

### 1. 殺人(傷害致死)・強盗致傷の実態とその影響

一方的な暴力行為によって家族を喪った方は非常に大きな混乱と深い悲しみに一挙に陥ります。また、母親が強盗致傷の被害の被害にあい重体となった経験をした方は、被害者となったことについてその思いを語っています。

#### 【事件直後の衝撃と混乱】

この方は、夫を故意にトラックで轢かれるという傷害致死事件で亡くされました。警察から連絡があって病院に駆けつけ、被害後「世界が一変した」と、つぎのように語っています。警察からしっかりとするように言われ、とにかく自分がしっかりとしなければと言い聞かせています。被害直後の強い衝撃を受けているときに、どのようなことばかけや対応が適切か、支援者は考えておく必要があります。

「あの当時のことって、記憶がすごく曖昧なところもあるんですけども、その場面、場面だけはすごく鮮明に、写真のように覚えていてます。病院に着いたら、救急外来に待っている人がいっぱいいて、警察の方が「ああ、お見えになったんですね」と言ったら、外来に待っているみんなに振り向かれたと記憶しています。(中略) 部屋に入る前に警察官の方が「奥さん、しっかりして。とにかくしっかりしてください」って、何度も言われたので、なんか私「とにかくしっかりしなきゃいけないんだ。たった一人だし」と思って、夫と対面しました。私は全くそのとき泣きませんでした。なんか、「え、え、何、何が起こった……、え？」みたいな感じてました。「(被害当初の心理的苦痛について)どのぐらいだったんでしょう。世界が一変した感じです。昨日まで暮らしていた生活からは、全く違うところに自分が来てしまった。でも、やるべきことがとにかくたくさんあるので、私はとにかくそれをやらなきゃいけない、やらなきゃいけない、夜も眠れないし、ご飯も食べられないけれども、もう、やらなきゃいけないって…」(P2)

つぎの方は、次男を出産後間もなく、夫を突然の傷害致死事件で亡くされました。幼い二人の子どもを抱え、夫の会社の引継ぎの問題も降りかかってきました。被害当初のことはあまり覚えていないとつぎのように語っています。警察の事情聴取では、遺族のこうした心理状況や家庭状況に配慮することの必要性が示されています。

「もう私が病院に行った時には、ちょっと死因が分からないってというような状況で、もうすでに亡くなっていたので。司法解剖に回すということになって、翌日主人と対面することができたんですけども。もうちょっと当時のことが、何ていうか、そのあったことがあまりよく覚えてなくて… 2年ぐらい記憶がないですね。ただ、主人のやっていた会社を私が継がなければいけないというか、「継いでもらいたい」という社員からの要望が四十九日明けぐらいにあって。事件直後は自分のことと、もうこれから子どもたちどうやって育てたらいいんだろうみたいな、そういう混乱している中で、急に四十九日明けに会社の人々が来られてそういう話になった時にすごく悩んだというか… (中略) 犯人が、最初分からなくて。逮捕まで2カ月半ぐらいかかったの。その間はちょっと警察の対応とかがあったり、もう何をやってたかよく分かんないんですけど。警察の方とはしょっちゅう会ってたような記憶がありますね。」(P4)

**【事件当日の状況がきっかけともなり、不安定な精神状態が続く】**

この方（父親）は、20代の長女が出勤途中に殺害されるという被害にあいました。事件当日、長女の帰宅が遅く心配していたところ、警察から深夜に連絡があり迎えの車で警察署に向かいました。しかし、署に着いても詳細は何も聞かされず待たされました。そのときの様子をつぎのように語っています。不安な状態で放置されていると感じた点は大きな問題です。警察は（悪い知らせであっても）時間を置かず適切に情報を伝える必要があります。また、ご遺体の処置の点についても課題が読み取れます。

「（警察署に行って）・・・その間も「何かあったんですか。うちの子どうかしたんですか」って聞いても、何も教えてくれない。警察では取調室に入れられて、入り口のほうには刑事が座って。そのときも「何かあったんですか。どうしたんですか」っていくら聞いても何にも、「いや、まだ教えられません」っていうことで教えてもらえない。（中略）・・・（時間の無駄だと詰め寄ったところ）捜査の責任者を連れてきて、「今日、〇〇区で殺人事件がありました。着衣と写真で確認しましたが、被害者はお宅のお嬢さんです」と言われて、涙がぼろぼろと出た記憶はあるんですけど、妻も下の子も泣き叫ぶってことは全くなかったんですね。（中略）・・・で、明け方になってやっと、じゃあ、お嬢さんに会ってくださいと。警察署の建物を出て、隣の死体安置所に連れていかれて、妻が一番最初に入って行って、次が僕で、（下の）娘が次と。横たわっているのを見ても、ああ、〇〇（長女の名前）だ。でも、苦しそうな顔してないなって、何かぼんやりそんな感じを持ってたということ。そうしているうちに突然、妻がしゃがみ込んだんですね。貧血でも起こしたのかなと思って助け起こそうとしたら、大丈夫っていうことで。後で聞いたら、首の傷がちらっと見えたんで確認しようと思ってしゃがみ込んだら、ざっくり切られたのがそのままだった。後で言っていましたけども、警察は、あそこは包帯を巻くなり何なりして隠しといてほしかった。それが後のトラウマになって、夜中の夢で、ナイフが飛んできて自分のおなかを切るっていうのにつながったのかなっていうふうに思ってるんですけどね。」(P1)

上記の方は、事件から1年たっても犯人はつかまらず、妻の精神状態が非常に不安定になりました。警察から紹介された病院にかかり、睡眠薬に頼るようになった状況が語られています。被害者遺族の精神状態に詳しい精神科医が治療にあたることができたら違っていたかもしれません。

「（被害後1年くらいから刑事がまったく来なくなり）、妻も、うちはもう警察から見放されたね。犯人もきっと捕まらないよなんていうことで、すごく落ち込んでいたんですね。事件から2~3週間たってから、妻が夜寝るときに電気つけたままにしていっていい？って聞いてきたんですね。何でって聞いたら、さっきの、暗闇からナイフが飛んできて自分のおなかを切るっていう夢と、あともう一つ見る夢は、すごい怖い顔をした中年の男性、その後ろに中年の女性が2~3人。その女性たちは何か訳の分からないことを、聞き取れないようなことだけど、何かべちゃべちゃとしゃべってると。その男が自分のほうを指さして「死ね。死ね」って言う。そういう夢がすごく怖いからっていうんで、電気をつけたままにするんですけども、でも、つけたまま寝ても、やっぱりその夢は見てみたいなんですよ。僕自身も、すごく明るいから寝るのが浅くなって、ちょっと妻が見動きしたりすると、ぱっと目が覚めるんですよ。そんな感じで、しばらくすごして・・・」 「（妻は）院長先生に診てもらったんですけども、後で院長先生にいろいろ聞いたら、僕は心療内科の専門じゃないんです。外科の専門で、たまたまこの病院に院長として呼ばれたので、院長として来て、そういう心の問題についても一応診察してますということ、じゃあということで・・・。妻はそれから薬欲しさにずっと、亡くなるまで通ってまして。事件後の妻は、睡眠薬もらってからは、夜10時、11時ぐらい、お風呂に入って薬を飲んで、それからダイニングの自分の椅子に座ってじっと待ってるんですよ。眠気が来て、ああ、もうどうし

ようもないっていったときにさっと 2 階へ行って寝ると。朝なんかも僕が出勤する時間に起きられないってこともしょっちゅうありましたけども、そんな状況で薬に頼って寝てたという状況です。」(P1)

### 【遺族の深い喪失感と自責感】

上記の方は、妻が深い悲しみと喪失感から自死されました。妻への思いを自責感とともにつぎのように語っています。こうした喪失感を独りで抱え込むことがないようにするためには何ができるか、多面的なサポート体制を整えることが肝要です。

「(妻は、小学生の女兒がプール事故で亡くなったニュースを聞いたことが引き金となり)・翌日恐らくリストカットをして、訳が分からなくなって、ふらふらと歩いて行って、踏切に。だから、心神喪失か心神耗弱状態。でも、心の奥底には、娘のところに行きたいという気持ちはあったみたいなんですけど、それがそういうふうにしたのかなって思うんですけどね。ですから、ほんと、今でも、いわゆる被害者ってみんなそう思ってるみたいなんですけど、何で、僕が(被害当日)娘を迎えに行かなかったんだろうとか、妻のことを何でもっと支えきれなかったんだろうとか、そういう思いってというのはずっと今でもあるんですよね。そういう思いが出てくる回数ってというのは、年と共にだんだん少なくなはって来ますけど、それが消えたわけじゃないんですよね。」(P1)

### 【長期にわたる精神的ダメージ:精神的な波があつて長いこと苦しむ】

夫を暴行事件で亡くした方は、被害後 1 年ほどしてひどく体調を崩し、周囲の助言で被害者支援に詳しい精神科医に通い、月 1 回のカウンセリングを受けるようになりました。10 年間ほど通院し服薬も続けますが、思うように改善しませんでした。服薬と日常生活の支障について、医師とオープンに話せることが必要でした。本人の判断で薬をやめたことで、気持ちのアップダウンの波が落ち着いてきた経過が詳しく語られています。

「ただ 1 年ぐらいたった、まだ裁判進行中なんですけども・・ 体調が悪くなってしまって。たぶん眠れてないし、食べてなかったと思うんですよ、あまり。2 カ月で 7 キロ体重がガタンと落ちたりとか。何とか仕事も行って、夜は(子どもに)乳飲ませたりしなきゃいけないから、ほとんど眠れない状況があつて。(会社の役員から病院に行った方がいいと言われて)・・ で、何ていうのかな、幻聴とか幻覚とか、そういうものと現実がごちゃ混ぜな状況の精神状態になっちゃって。時々、何かつじつまが合わないことを会社でも言ってるらしくて。全然、私はそんな気が付かなくて・・」  
「それから月に 1 回カウンセリングに通うようになって。(中略)・・ 女性の先生だったんですけども、女医さんで。その先生に子育てのこととかいろいろ、会社のこととか、眠れてるのかどうかとか、ちゃんと食べてるの?とか。そういう感じでお薬を飲むようになっていったんですけども。(薬は)やっぱりどんどん強くなっていくので。大変だったんですけど、10 年ぐらいついてたかな。結構強い薬になっていって、でも体調もすぐれないし。薬飲んでも効いてる感じがしないとか、眠れないしってというのは変わらないしとかっていう状況が・・(続いた)。」

「もう体調は薬をやめてからは本当に徐々に良くなっていったんですけども。何だろう、精神的な面でどうなの?って言われると、やっぱりずっしり重たいものがこうある、日常生活を送るぐらいのテンションは保ててるかなぐらいですかね。あの時は、朝と昼と夜とでももう感情の起伏が激しくて。会社の部屋で一人で仕事してても涙が止まらないとかってというような、アップダウンがすごくひどくて。落ち込むともう落ち込むし。頑張ってるけども仕事行かなきゃっていうときは、多少テンション上げていかなきゃいけないから行くんですけど、また会社に着いたら何かずっと、ま

とったりとか。そういうのが徐々にこう、一日の振れ幅が、きょうは大丈夫、でも次の日駄目とかってというのがだんだんこう期間が伸びるようになって。今はこう、波が緩やかになったかなって感じですよね。」(P4)

### 【マスコミによる過熱報道】

この方は、夫を通りがかりの複数の若者から一方的に暴行され、亡くされました。夫が外国人で残忍な暴行殺害事件だったこともあり、マスコミに大きく取り上げられ大変苦勞します。周囲からの二次被害やマスコミ不信に陥ったことについても、つぎのように語っています。マスコミ報道が被害者の心理面や生活全般に与える悪影響についてはもっと周知され、改善する必要があります。

「一番大変だったのは、マスコミに報道されたので。プラス、防犯カメラの映像があったので、割と大きくなって、マスコミの方もすごかったですし。主人が外国人だったので、(母国で葬儀をする必要があります)遺体の搬送とかもすごい大変やって、その辺が一番大変だったかな。」 「基本的にはハヤクゼロ(被害者側に落ち度がなく加害者に100%の責任がある)の内容ですし、一方的に(暴行)している映像が出てるので、同情的というか、ではあったんですけど。逆にそのことで、いろんな人からも何だかんだ、(店を経営していたので)、言われたりとか。同情的ではあるんですけど、それを受け止めるっていうか、対応するのがすごい大変でした。」

「一番大きいのは、やっぱりマスコミに報道される側になる(こと)。何ていうんだろう、報道されることと実際の事実ってというのが違うというか、物の捉え方の違いだと思うんですが、何か違う世界があるというか…。だから、報道されるのが全てじゃない…。何か物の見方っていうか、裏を見るようになってしまった…。」(P3)

### 【被害者遺族になった者の気持ち】

上記の方は、被害者遺族になって安心感や安定感を失った気持ちをつぎのように語っています。

「何か築いたものが一度に消えてしまうっていうのは……(いまだに変わらない)。今から何をしたらとところで、崩れてしまう可能性っていうか、そういうことがあるんだっていうのは……(いつも思っている)」

「… 具体的などこっていうのも、何か諦めてしまっているんで、何かもうしょうがないっていうか、もう変わりようがないのかなっていうことはあります。」(P3)

### 【死についての幼い子どもの反応とその受け止め】

夫を喪ったとき子どもがまだ幼かった方は、父親の死に対する子どもの問いとその受け止め方についてつぎのように語っています。子どもも被害の衝撃を感じており、どのように不慮の死を伝えるかは大きな課題ですが、このエピソードはその伝え方、子どもの思いについて示唆を与えてくれます。

「長男が(事件)当時 3 歳だったから一番悩んだのは、たぶんいつかお父さんは死んじゃったっていうのが分かる時期が来る、それがいつなのか分かんないけどいつかは来るだろう… (精神科の先生に相談したところ、直接自分の口から言った方がいいと言われ)… ちょうどもうすぐ 5 歳の誕生日を迎えようかなっていう時期に、初めて長男が「お父さん、死んじゃったの?」って突然聞いてきたんですよ。4 歳何カ月かのときに。「ああ、もうその瞬間が来たんだ」と思って、ちゃんと向かい合って座って「今からちゃんと説明するから、よく聞いてね」って言って、「お父さんはちょっとそういう事件に巻き込まれて亡くなったんだよ」って。「どこにいるの?」とか。「いや、亡くなったの」「死ん

じゃったの？ 死んだらどこに行くの？」「うーん、どこだろうね。天国かな」とか。「天国ってどこにあるの？」「お空の上かな」とか。「僕も行きたい」とか、いやいや。「お父さんに会いにいきたい」とか、「いやいや、ちょっとそれはできないんだけどね」って。何か「どんなところ？」って聞くから、「どんなところだと思っ？」みたいに。「分かんない」「たぶんお花がいっぱい咲いてて、何か気持ちいい風が吹いてて、おいしいものがいっぱいあって、そういうところだよ」とかやったんですね。それで、その日の夜は「分かった」みたいな感じになったんですけど。ところがそれが 2 週間も続いたんですよ、毎晩、毎晩、毎晩、寝る前に「お父さん、死んじゃったの？」ってまた聞いてくるんですよ。また前の日と同じ話を 2 人でして、それが 2 週間続いて、やっと言わなくなったんですよ。「死んじゃったの」って聞かなくなった。(中略)・・・2 週間ぐらい話してやっと落ち着いたというか、「お父さん、死んじゃったんだよね」みたいに、本人なりに納得してくれたのかなって思ったんですけど。」(P4)

### 【事件前の家族関係が及ぼす影響】

この方は、高校生のときに親の仕事の関係で外国に住んでいて、母親が強盗致傷の被害にあい脳挫傷の重体に陥りました。家庭生活が一変し、長男として家事を引き継ぐことになった負担や、事件前の家族関係が被害に及ぼす影響についても語っています。独自の被害体験として、多角的な視点を提供しています。

「母親が結構主婦的なことをやっていたので。その負担というか、もろもろの家事をする人がいなくなっちゃったので、それを僕もやっていたことが負担でした。」(お手伝いさんもいたが)・・・ちょっと感覚とかが違ったりして、結局、僕がやるが多かった。父親は仕事で、弟は当時小学生だったので。そういう感じです。」

「何ていうか、多分、結構家庭の特殊性があると思うんですけども。その事件が起きる前、両親の中が悪く(中略)・・・家にいるのが結構しんどかったんで、その仲が悪かった時期に・・・だから、事件自体に関しては心理的抵抗、苦痛はなかった。もろもろの何かですでに結構苦痛を負っていたので、みたいな感じですか・・・」(P5)

### 【当事者になって分かる「被害者」親の不適切さ】

上記の方は、家族が被害にあったことが1つの「起点」となって、大学院で犯罪心理学、法学を学ぶようになりました。ロースクールでの勉強について尋ねたところ、つぎのように語っています。被害者としてステレオタイプの被害者像を押し付けられることに不快感をもつ様子がうかがえます。

「(被害体験を客観的にみることについて) どうなんでしょね。そう努力してきたっていうだけですね。多分、今も被害者学の授業あったとしても、受けなかったと思いますね。何ていうか、被害者学って「被害者はこうだ」みたいな、被害者は苦しんでいてみたいな、やっぱそういうところを出してくる人が多い印象があって。それって感覚としてちょっとステレオタイプな感じがするっていうか、率直に言ってしまうと、うざいなと思うので。多分、受けなかっただろうなと思いますね。そういう仕事大事だっていうのはもちろん理解してるんですけど。」

「さっき、うざいって言葉、さすがに強過ぎたかなって反省してるんですけども・・・支援する場では、やっぱりそう(被害者は大変だ、苦しんでいる)というふうに提示するのが分かりやすいっていうのは分かるんですけども、それによって、そう思っていない人が「俺ってかわいそうなのって思わなくちゃいけないの？」みたいな気持ちに僕はなるので。そういう意味では、かなり好ましくないと思っているということです。」(P5)